第5号　発行：平成25年3月31日

与那原町史だより

与那原町教育委員会 生涯学習振興課 町史編纂室
TEL098−871−9981　FAX098−871−9982　所在地　〒901−1304　与那原町字東浜27番地

↑分町記念写真
1949(昭和24)年4月1日撮影
大里村から分離して与那原町となった。
2列目右から4人目が初代町長の上原敏繁氏。
5人目が当時の大里村長、上原堅蒲氏。

← 与那原町役所
1949(昭和24)年建築。分町後最初の役所の建物。親川にあった。

(写真は2点とも町史所蔵)

編纂室より

与那原のあゆみを記録する町史編集事業は、編集体制をより充実させ、『資料編 戦後の与那原』発刊へ向けて関連資料の収集や聞き取りなどを進めています。この巻は、戦後の混乱期に分町して賑わい、発展した復帰の頃までの町の移り変わりを収めた一冊となる予定です。今年度の調査、収集資料の一部をご紹介いたします。

大里村から与那原町へ

～行政文書にみる与那原町～

与那原町は約六十四年前大里村に属していました。

しかし一九四九年、大里村から分離し、独自の町経営に乗り出し与那原町が誕生しました。

町史では、その分町に関する資料を収集しました。

『市町村廃置分合に関する書類』と名うたれた行政資料の中には、大里村から与那原が分離独立していく経緯が克明に記されています。

今回はその内容の一部（訳文）と、当時の新聞記事を紹介します。

大里村から分離独立したい その理由は… 村長から知事への稟請（訳）

『大第五一六号
一九四六年十二月二十三日
大里村長　上里堅蒲　印

沖縄県知事志喜屋孝信殿

分村に関する許可稟請

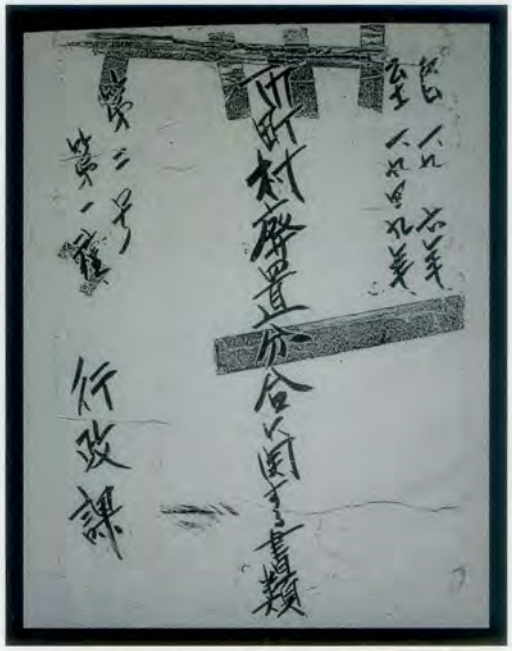
本村は沖縄本島の南部に位置し、南北二里余り、東西一里余り、長方形の村で、北に本島東海岸唯一の中城湾を控え、面積約二方里にして概ね農耕地が占めており、耕地面積約八五七町歩、人口一万二千人を有し、地味肥沃で農産物の生産が多い。

北部の与那原は国頭の東海岸及び大島方面と、首里、那覇、島尻との陸運海運の要路にあたり、物資の交流頻繁で各方面に発展性のある村である。

今次の戦災により、村は全面的に廃墟と化し、残存した村民も一時は失望したが、その後郷土愛と子々孫々のためにと立ちあがり、疎開者並びに復員者の帰還と共に着々とその成果をあげ、復興も軌道に乗りつつある状況にある。

そのような中商業都市的色彩を帯びている与那原は村の北端にあって純農村とはその経営を異にし、大正の中頃より、分村町制を施行し、双方ともその理想に向って平和な村を創造するために世論を醸成してきた。昭和十二年になってその要望は熱烈となり、時の大里村議会において満場一致で分村を決議し、ただちに分村期成会を組織して、本格的運動に着手し、県当局及び内務省まで陳情し、県当局においてもその必要を認められ、まさに実現の運びに至った時に支那事変大東亜戦争となり、その実現を見ずに今日に至った。

ここにおいて今次戦災により

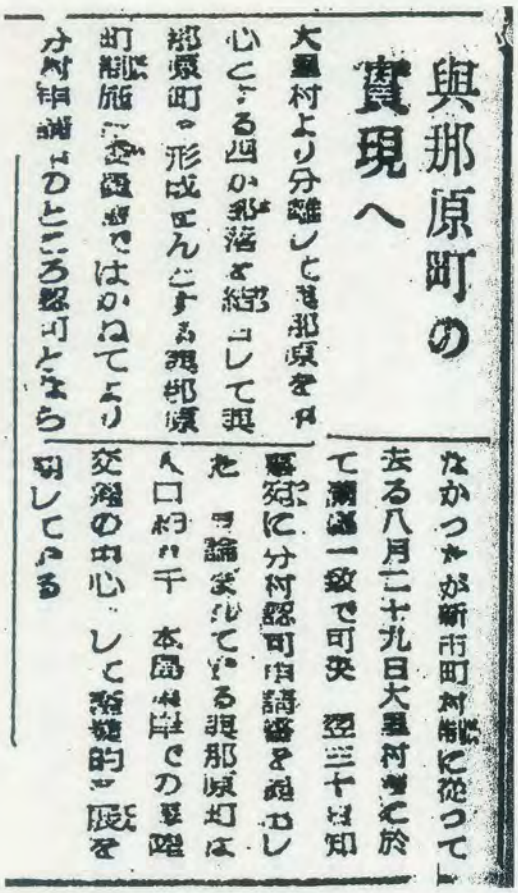


『市町村廃置分合に関する書類』複製本
町史所蔵

復興途上にある今日、大里村より分村し、商業港湾交通等の諸計画を都市的に計画するのは今日であると、与那原、与原、大見武側住民の熱望により、村当局において本問題を採択し、十月九日村政委員会に提案、慎重に本問題を協議懇談した結果、全会一致賛成した。

これをもって双方から分村委員を選出し、分村委員会を設け、こまかく調査検討すること数回に及んで、委員会を開催し、なお分離側の各部落において分村委員による分村に関する懇談常会を開き、常会員全員が賛成した。

願わくは全村民の熱意を御採択の上、すみやかに与那原町（仮称）設置の御許可を下さるよう別紙関係書類を添えて比の段に及び稟請いたします。』



與那原町の實現へ

大里村より分離して與那原を中心とする四ヵ部落を結集して與那原町を形成せんとする與那原町制施行の要望ではかねてより分村申請はひとゝろ認可となら

なかつたが新市町村制に從つて去る八月二十九日大里村議に於て滿場一致で可決　翌三十日知事宛に分村認可申請書を提出した　言論界にも與那原地区は人口約八千　本島南岸での要路交通の中心　として經濟的に既を明してゐる

『うるま新報』1948年9月24日付　1面
琉球新報社提供

板良敷・当添も一緒に…（訳）

『与那原区の分村町制施行に当添区板良敷区の参加に関する議案提出に就いて

以前に与那原、与原、大見武、上与那原区域をもって大里村より分村町制施行の議案を提出し、満場一致をもって可決致しましたが、経済、教育、地理、生活様式の点から前記四カ部落と密接な関係にある当添区、板良敷区とが、分村町制施行に参加を希望しておりますので、これは極めて自然の成り行きだと認めまして、町村制第三十一条により、ここに議案提出致します。

一九四八年十二月三日

當眞正仁　山城清蒲
上原敏範　親泊元長
上原繁義

大里村議会議長
上原敏範殿

一九四八年十二月四日大里村議会において原案通り可決す。』

戦後の与那原の町並み　上原初氏提供

遂に分村の許可おりる（訳）

『起案一九四九年四月一日
校合１９４９年４月１日発送
総務部行政課主任　サイン

知事
官房長　　文書課長
総務部長　　行政課長
　　総務課長
（各々の手書きのサイン入り）

親川にあった頃の与那原町役所
（人物は元助役の小渡良敏氏）町史所蔵

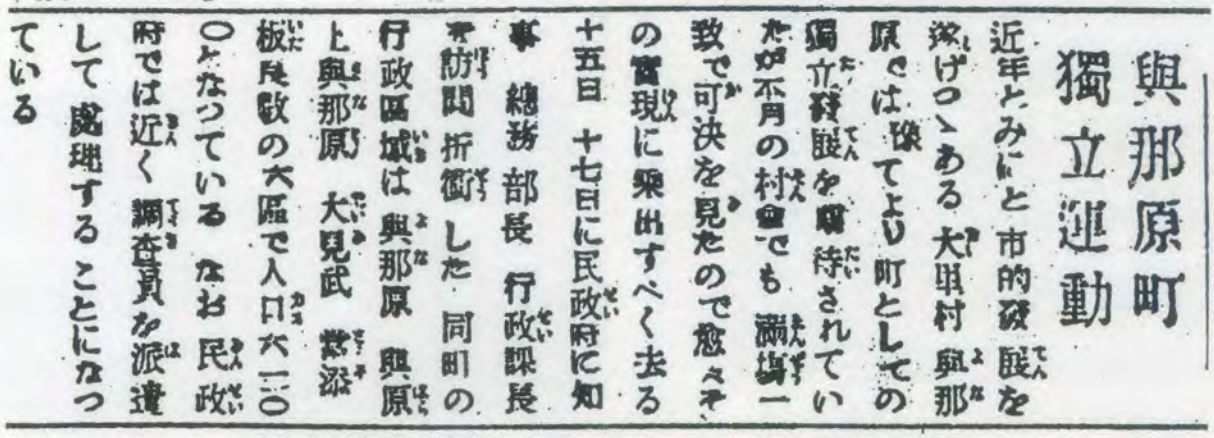
大里村分村について伺

標記の件に関して一九四九年十二月二十三日及び一九四八年十二月四日附別紙の通り分村許可申請提出になっておりますが、調査致しましたところ、左記起案理由により分村するのが適当と思われますので、左案の通り許可してさしつかえありませんか。あわせて通牒案共にお伺い致します。

起案理由

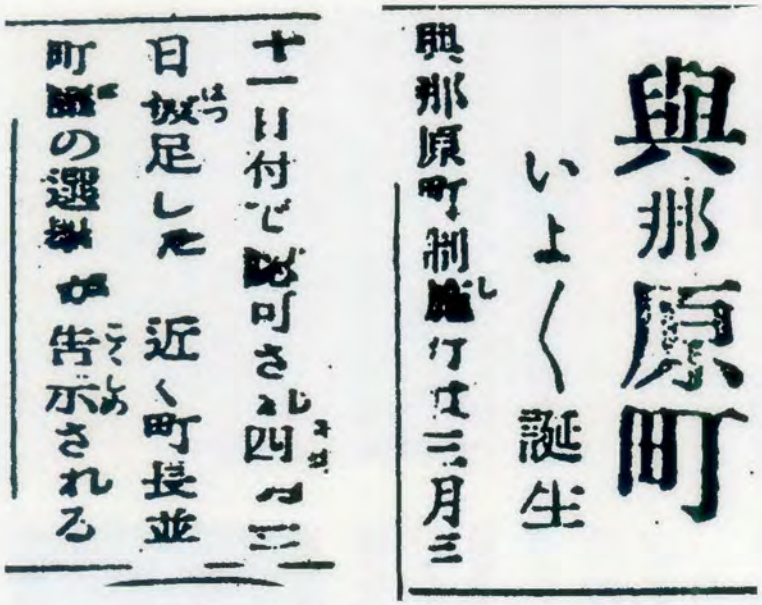
一九四六年十二月二十三日及び一九四八年十二月四日附別紙の通り分村許可申請書類提出になっておりますが調査致しましたところ、分村は別紙許可申請理由の通り、大正年間の中期より大里村分村与那原町設置の論、相当根強く県当局などその筋に対し、極力目的完遂の為に陳情して来ておりましたが、昭和十二年に至り、時の大里村議会の全会可決をもって分割を決定、直ちに与那原町設置期成会を設け、本格的な運動を開始すると共に、分村許可申請書を内務大臣に提出し、重ねて以来数年にわたり関係者当局に陳情を反復継続した結果、県当局もその必要を認め、内務省へ知事の副申書を添付して上申したのでありますが、戦争勃発により、結末を見ずに終ったような訳であります。

与那原町（仮称）の戦前の分村計画の経過は右のような次第でありますが、今回の分村については、**一九四六年十二月二十三日附大第五一六号の通り**、大里村議会の全会可決でもって、


與那原町
獨立運動
近年とみにと市的發展を遂げつゝある大里村與那原では除てより町としての獨立發展を期待されていたが不月の村會でも滿場一致で可決を見たので愈々その實現に乘出すべく去る十五日十七日に民政府に知事 總務部長 行政課長 來訪 折衝した 同町の行政區域は與那原 與原 上與那原 大見武 數部 板良敷の六區で人口六一二〇〇となっている なお民政府では近く調査員を派遣して處理することになっている

『うるま新報』1948年12月20日付　1面　琉球新報社提供

現在の与那原（与原、大見武、上与那原の区域）をもって、大里村より分離したいとして許可申請を提出してありましたが、当行政課としては財政的見地より一村として自立する可能性がありませんので、分村は不可能だとの見解の下に進んで来たのでありますが、一九四八年十二月三日の議会において、新たに当添区、板良敷区を加えて与那原町として分村したいと許可申請書が提出されましたので、当行政課としては新たにこれに再検討を加え、研究調査しましたところ、別紙歳入歳出仮予算並びに類似市町村財政比較表及び税負担額類似市町村比較表の通り、財政的見地より充分一村として自立でき、また住民の負担関係から見ても負担過重にはなりませんので、この際与那原町として大里村より分離させ、沖縄本島東海岸唯一の商業都市として発展を期せしめ、住民の福利増進を図ることを得策と考察されますので、分村を決定し起案した次第であります。


與那原町
いよ〳〵誕生
與那原町制施行は三月三
十一日付で認可され四月三
日付足した　近く町長並
町議の選挙が告示される

『うるま新報』1949年4月4日付　1面　琉球新報社提供

指令案

四月一日発送済　サイン

沖縄民政府指令第二一三号

大里村

一九四八年十二月四日大第五二七号申請に係る大里村を分割し与那原町設置について許可する。

一九四九年四月一日

知事名』

※『』は原文より引用

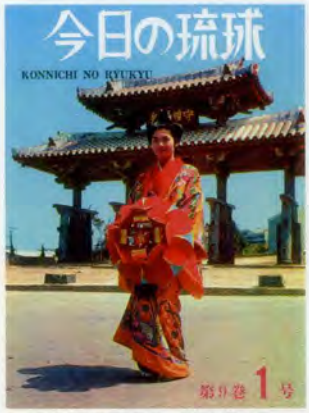
分町初期の
与那原町役所職員
『よなばる　今・昔』より

アメリカから見た与那原

～USCAR発行雑誌から～

戦後、琉球列島米国民政府（USCAR）が発行していた『今日の琉球』『守礼の光』という広報誌があることをご存知でしょうか。

『今日の琉球』は、一九五七年（昭和三十二）十月から一九七〇年（昭和四十五）一月号までの約十七年にわたり発行されました。



『今日の琉球　第9巻1号』
1965年1月発行　山内敏春氏提供

発刊の目的は、琉球の人々が世界の人々と提携していけるように手助けをすることや、琉球の人々がよりよき明日のために琉米が互いに知恵を出し合い建設的な提言が出来る場を創り出すことを創刊号において示しています。

『守礼の光』1964年10月号
山内敏春氏提供

しかし、実際の内容はニュースの要素が強く、米国民政府の説明や宣伝、米国民政府派遣による海外研修者の感想や旅行記、琉米親善関係や綱曳などの文化紹介などが主なものでした。

『守礼の光』は、一九五九年（昭和三十四）一月に創刊され、沖縄が日本復帰した一九七二年（昭和四十七）まで発刊されました。

この雑誌の特徴は、米陸軍第七心理作戦部隊が編集・発行に関わっていた点です。また、内容は沖縄の文化やアメリカの歴史などを紹介しています。

どちらの広報誌も沖縄住民向けに編集されており、執筆者はUSCARが選出した沖縄の人々が主でした。また、各市町村、学校などに無料配布されていました。

それでは、いくつか与那原関連記事を紹介していきましょう。

テーマ①　与那原町紹介「一日だけさわがしい　与那原町」

（『守礼の光』一九六一年四月号）

この記事では、著者が与那原在住のとある家の主人に与那原について聞いた話がまとめられています。その一部を抜粋して紹介します。

…前　略…

「ただ通り過ぎるだけでは気づかないでしょうが、ここにはカワラ工場が十三もあるのですよ。原料の土がたっぷりあるので、琉球のカワラやレンガの七十パーセントはここでつくっています。近ごろは沖縄のどこへ行っても、新しいカワラ屋根が見られるでしょう。そのカワラの大部分は、与那原産といってもまちがいがありません。」

…中　略…

「ここの水は、地下のすなの層でじゅうぶんにこされてきますから、とてもきれいにすんでいます。井戸もたくさんあって、いくらでも水が出ます。わざわざ浄化する必要はありません。そのほかここには、豊富な電力、りっぱな警察や消防署、郵便局、四つの病院、四つの銀行、四つのキリスト教会、それに神社も

あります。」
主人は立ち上がって海の方をゆびさし、
「あの海水浴場は、広々としてきれいなことや安全ということからいって沖縄では他にひけをとりませんよ。」とほこらしげに言うでしょう。…

与那原海水浴場　町史所蔵

このように各施設の多さからも与那原が街であったことが分かります。文中の「四つの病院」とは、現段階の聞き取り調査等で判明している嶺井医院、中村医院などのことかと思われます。

また「四つの銀行」は、南陽相互銀行与那原出張所、沖縄相互銀行与那原出張所、琉球銀行与那原支店、沖縄銀行与那原支店のことをさしています。

海水浴場は与那原の人々だけでなく、那覇など近隣市町村から学校行事で訪れることも多かったといいます。

テーマ② 綱曳紹介

（『守礼の光』一九六四年八月号）

さて与那原において「一日だけさわがしい」日となるのが大綱曳でした。

戦後占領期のイベントが少ない時代、与那原大綱曳は米国人も魅了するほどの大イベントでした。

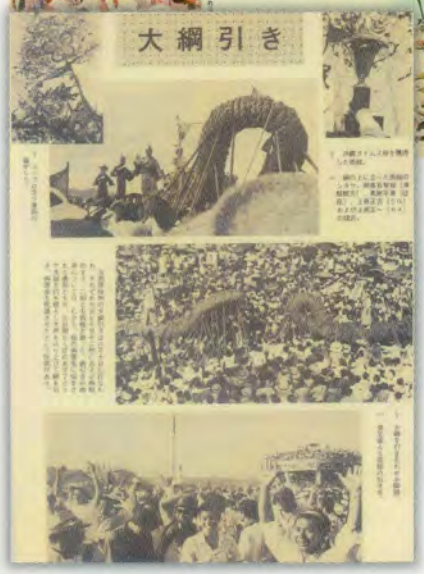
与那原の豊年祭りは，沖縄で最も多彩な行事の一つでその一番の呼び物は大仕掛けな綱引きである。

今年のお祭りは8月9日（旧暦7月2日）だが，ときあたかも町制施行15周年（1949年に町制）に当るので格別の意義がある。

この大綱引きには，数千人の強健な男女が直径1メートルの綱にとりつく。東の男綱，西の女綱，それぞれ相手を引き寄せようと根限りの力をしぼる。

写真は，盛況だった去年の大綱曳風景である。

（原文ママ引用）



（上）『守礼の光』1964年8月号
山内敏春氏提供

（左）『今日の琉球　第13巻10号』
1969年10月発行
山内敏春氏提供

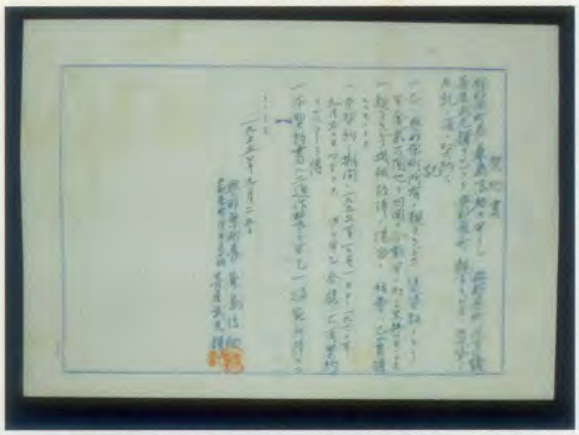
親子ラジオのあった頃

―与那原の小さな放送局―

戦後、沖縄のラジオ放送は、一九四九（昭和二四）年に旧具志川村（現うるま市）栄野比で始まった。

当時は電力事情が悪く、ラジオの受信機を持つ家庭も限られていた。

米軍政府はガリオア援助資金で市町村に共同施設を作り、各家庭が有線でラジオを受信できるようにした。音の配給とよばれた親子ラジオが広がるきっかけとなった。



親子ラジオの契約書　喜屋武元貴氏提供

やがて、多額の資本もいらず、個人経営で採算が取れる社会貢献度の高い事業として、一九五二（昭和二七）年頃から全島へ普及し始めた。

写真（上）は、一九五五（昭和三十）年十月に元町議員の喜屋武元輝氏が町と交わした親子ラジオ賃借の契約書である。

与那原の親子ラジオ放送局は、森下区で開局した。社名は「與那原有線放送社」。

開局時に技術面でかかわった眞榮平實氏（町史・森下区字誌編集委員）によれば、親子ラジオの親機を自宅に置いて放送させたとのこと。

ラジオを聴くには、スピーカーと電源、音量調節のついた箱のような子機（受信機）を使った。

聴取料金は、米ドル時代で月五十セント。普及台数は、『第一回琉球統計年鑑』によると、一九五五（昭和三十）年十二月末現在の与那原町の親子ラジオ総数が五百台とある。

加入希望者が多く、配線工事が順番待ちになることもあったという。

電信柱や軒、庭木を頼りに、有線で各家庭などへ子機をつないだ。

総勢三名程度で運営し、設置や管理は会社側の負担で、台風などで線が切れると、修理も大変だったという。

放送内容は、当時の琉球放送やラジオ沖縄などをそのまま流すことが多く、放送時間は、朝五時半から夜十二時半までであった。

三線演奏を録音して放送することもあったが、一番の特徴は地域密着情報で、町内の告別式案内や、役場からのお知らせを随時アナウンスしていた。

小型ラジオやテレビの発達などで徐々に加入者は減ったが、復帰過ぎまで小さな放送局は続いた。

親子ラジオの親機と子機
町綱曳資料館所蔵

与那原町史編集委員会 紹介

編集委員会

委員長
吉浜 忍

副委員長
山内 敏春

委員
眞榮平 實

委員
新垣庸一郎

委員
渡名喜興憲

専門部会

部会長
吉浜 忍

副部会長
新里勝彦

委員
崎原恒新

委員
豊見山和美

委員
鳥山 淳

事務局／宮平律子　桑江朝照　花木智美　富川恵子　瑞慶覧峰子　津覇美那子